

愛着パターンの謎

山本 政人

愛着理論の原点である Bowlby の *Attachment and Loss* 第 I 巻は、1969 年に初版が発刊され、1982 年に改訂版が発刊された。初版が発刊された後、愛着研究は目覚ましく発展し、その成果を取り入れて改訂版が出されたのである。改訂版では、Bowlby が初版で提示した理論的枠組は変わっておらず、Ainsworth らの実証研究の成果が取り入れられている。

特に重要なのは、愛着のパターンに関する Ainsworth の分類を紹介したことである。よく知られた分類であるが、改訂版日本語訳（1991）より以下に引用しておく。

パターン B

母親に対して安定した愛着をもつと分類された乳児は対象児の大多数を占め、彼らの多くは遊びが活発で、短時間の離別後における苦悩状態においても母親との再会後に容易に落ち着きを取り戻し、ほどなく遊びに没頭する。

パターン A

母親に対して不安定な愛着をもち、また回避的であると分類された乳児は、標本の約 20% で、母親との再会場面で母親を避け、特に 2 度目の短時間の不在後にその傾向がいちじるしい。彼らの多くは自分自身の母親に対してよりも、見知らぬ人に対して、より親しい態度で接した。

パターン C

母親に対して不安定な愛着をもち、また反抗的と分類された乳児は約10%で、母親との接近および接触と相互関係の拒否との間を往復する。ある者は極度に怒りっぽく、あるものは不活発である。(Bowlby, 1982)

この分類は Ainsworth の新奇場面法 (strange situation procedure) における子どもの反応から導き出されたものである。B は安定型、A は回避型、C はアンビバレント型とも呼ばれる。後にこの3つ以外に D=無秩序・無方向型というパターンが見出されるが、当初の3パターン分類についてはいくつか疑問が残る。

1. なぜ3パターンなのか

当初の愛着の3つのパターンは、B が大多数、A が約20%、C が約10% ということで、B は約70% ということらしい。新奇場面法の再会場面において、母親を避けたり、拒否したりする反応は確かにそれほど多くはなさそうである。では、それ以外の子どもはみな母親との再会を喜び、落ち着きを取り戻したのか。それだけとは思えない。母親との再会に喜びを示さず、回避や拒否とも異なる反応を示した子どもはいなかったのか。そもそも母親との分離において不安や苦痛を示さず、再会して母親を避けるのでもなく、淡々と遊びに没頭していた子どもがいたはずである。そのような子どもは安定型に分類されたのであろうか。少数である安定型以外(いわゆる不安定型)の子どもをさらに回避型とアンビバレント型に分けているのに対し、安定型という分類は大ざっぱである。安定型をさらに細かく分けることは可能であると思われるが、それをしなかったのは臨床的に意味がないと考えたためであろうか。後に追加された「無秩序・無方向型」もごく少数であるとされるが、臨床的に意味のあるカテゴリーと考えられたのであろう。しかし愛着研究の観点からすると、安定型をより細か

く見ることは無意味ではないと思われる。

また、3パターンにはアルファベットの割り振られているが、最も多数で標準的と思われる安定型がパターンAではなくパターンBである。回避型は avoidant の A なのかとも思われるが、安定型がB、アンビバレント・不安型がCである理由は見当たらない。実は、当初パターンA、すなわち後に回避型とされるパターンを安定したパターンであると考えていたのではないかという推測ができる。そしてそれを裏づけるような以下の記述がある。Ainsworth (1963) からの引用である。

母親にもっとも強く愛着を示していると思われる乳児たちは、抵抗行動や分離不安をほとんど示さなかった。むしろ彼らは周囲を探索したり、彼らの限界を広げて他の愛着行動をなし得るように母親を安全なよりどころとして用いる準備態勢を示し、それによって、母親に対する彼らの愛着の強さを明示した。不安で不安定な子どもは、母親を当然な存在として考えている幸福で安定している子どもに比較して、母親により強く愛着を示すように見えるであろう。(Bowlby, 1969 邦訳 1976)

不安をほとんど示さずに探索をする子どもがもっとも愛着を強く示す子どもであるという Ainsworth の指摘に素直に従えば、母親との分離に不安を示さず、淡々と遊び続ける子どもこそ安定型である。そして母親との分離に不安を示し、再会すると落ち着くというのは、むしろ不安定な子どもである。Bowlby も当初は不安をほとんど示さずに探索をする子どもを安定型と考えてそれを A とし、母親との分離に不安を示す子どもを B としたのであろう。ところが、Ainsworth の研究が進むにつれ事態は変わったようである。Ainsworth の新奇場面法における子どもの反応の記述は、初版と改訂版とでは異なっている。初版では以下のように述べられている。

母親の退室時に示された14名の乳児たちの行動は2つに分類された。第1のグループは母親が退去してもほとんど遊びに影響をうけないと思われた6名であった。すなわち、彼らは探索活動をつづけ、ほとんど泣かなかった。しかし、彼らの全員が母親の退出に気づいていたし、戸のほうへ行ったり、開けようとしたりして、母親と再び一緒になりたいという気持ちを示した。他の8名はすべて、できるだけ目立たないように退出したにもかかわらず、母親が去った後、激しく泣いた。またそのうちの5名は非常に激しい苦悩状態に陥り、見知らぬ人による慰めを拒否した。（中略）母親が戻ってきたときの乳児の行動は、母親の退室時に示された行動に比較して、かなり類似したものであった。すなわち、2名以外のすべての乳児たちは直ちに母親に近づき、泣いていたものは泣きやむことが多く、特に抱きあげられるとそうであった。（Bowlby, 1969 邦訳1976）

改訂版では上記の記述とこれに続く14名の乳児の反応の記述は削除されており、代わりに以下の記述が追加されている。

母親に対する子どもの愛着の安定度を示すために特に役立つ指標は、短時間の母親の不在後に母親とその再会場面で示す子どもの反応の仕方によって得られる。安定した子どもは目標修正的でよくまとまった行動のつながりを示す。すなわち、母親を歓迎して接近した後に、抱かれたがったり、しがみついたり、そばにいたがったりする。他のグループの子どもたちによって示される子どもの反応は、おもに次の2種類に分けられる。すなわち、母親との再会場面において明らかに苦悩あるいは忌避を示す反応と、求めると同時に抵抗を示す愛憎並存的な反応である。（Bowlby, 1982 邦訳1991）

初版では、主として母親が出ていく際の子どもの反応が分類の基準となっていたが、改訂版では、母親との再会場面における子どもの反応が重視

されており、その反応は接近か、苦悩あるいは忌避か、愛憎並存的反応のいずれかに分類される。初版では、再会後ほとんどの子どもが母親に接近し泣きやんだということから、ほとんどの子どもがパターン B であったと推測されるが、その後の研究において再会後の 2 パターンが見出されたのであろう。

Bowlby らが母子分離時の子どもの反応に着目したことは自然である。日本でも、清水（1999）が母子分離時の幼児の反応に着目し、そこで見出されたタイプと青年期の自己像との関連を検討した。清水は 1 年間母子分離場面を観察し、母子分離の型を当初より安定して母子分離できる分離群、当初は母子分離できないが最終的には安定して母子分離できるようになる安定化群、最後まで母子分離が不安定である不安定群の 3 群に分類した。ただ、母子分離型と青年期の自己像に関連は見られなかった。

Bowlby も当初は母子分離の際の子どもの反応に着目したが、後に再会時の反応に着目し、そちらを重視した。これは重要な変更であり、Bowlby の慧眼であったといえるかもしれない。彼は「目標修正的」な反応を重視したのである。安全基地としての母親がいなくなった時、子どもはそのまま探索を続けるか、母親を探したり、泣いて母親を求めたりする。この場合、母親を探し求める反応の方が「目標修正的」である。また、母親と再会して泣くことをやめ、母親との接近を維持しようとする反応も「目標修正的」である。しかし母親を忌避したり抵抗したりするのは「目標修正的」な反応ではない。母親を安全基地として活用できていないからである。

当初 Bowlby が考えたパターン A は、母子分離時に安定している子どもであり、パターン B は不安定になる子どもであったと思われる。その後、母子分離時に一見安定しているかに見えた子どもの何割かが、再会後に母親を忌避するような反応を示したことから、パターン A を回避型としたのではなかろうか。

改めてなぜ 3 つのパターンになったのかという疑問が出てくる。仮に母

子分離時と母子再会後の反応をそれぞれ「泣く一泣かない」「探索再開または継続—探索せず」と分類すれば、分離×再会時の反応パターンは4通りである。「泣く×探索再開」がパターンB、「泣く×探索せず」がパターンC、「泣かない×探索継続」がパターンAであろう。そして「泣かない×探索せず」はどのパターンにも当てはまらない。このようなパターンは見られなかったのであろうか。

2. 愛着パターンは何を意味しているのか

愛着パターンは子どもの愛着の特徴を表すもののように考えがちであるが、相互作用のパターンであると Bowlby は述べている。ということは、愛着パターンは子どもと愛着対象との関係性の特徴を表すものである。Ainsworth らが新奇場面法によって見出した愛着パターンは、あくまで子どもと母親との相互作用のパターンである。母親が愛着対象ではなかった場合、それは厳密には愛着パターンではなく、母親との相互作用のパターンとするべきである。

保育所等の施設で育てられている子どもでなければ、母親以外に愛着対象がいる可能性は低いですが、愛着パターンが2者間の相互作用のパターンであるとすると、母親との相互作用が不安定であっても、母親以外の他者との間に安定的な相互作用を行える可能性はある。Bowlby は愛着形成に生後数年間の敏感期があるとしており、だとすれば、生後数年の間に母親に代わる愛着対象が見つければ、母親以外の人物と安定的な相互作用を行うことができるであろう。

Bowlby は改訂版において、愛着パターンと子どものパーソナリティに関連が見られることを指摘した。たとえば、自我制御 (ego-control) や自我弾性 (ego-resilience) との関連である。Arend ら (1979) によれば、安定的な愛着を示した子どもの方が有意に高い自我弾性の得点を示し、自我制御においても適度な得点を示した。不安定な愛着を示した子どものう

ち、逃避的な子どもは過剰な制御、反抗的な子どもは過小な制御の得点を示した。このような結果が見られたが、Bowlby は次のようにコメントしている。

強調しておかなければならないことは、これら5歳児の評価は、実験場面、学校、研究室といった母親不在の状態で行なわれたことである。したがって、安定的な愛着を示した子どもの評価得点は母親の存在とは無関係なわけである。(Bowlby, 1982 邦訳 1991)

安定的な愛着を示した子どもは、母親が不在の場面において、高い自我弾性と適度な自我制御を示したのである。安定的な愛着を形成した子どもの方が適応的なパーソナリティを形成しているといえる。同様のことが「概念透視力 (conceptual perspective taking)」についても見られる可能性を Bowlby は指摘している。

概念透視において高得点を示した子どもの母親は、低い得点の子どもの母親と比べて以下の点で異なっていた。高い得点を示した子どもの母親は、子どもの感情や実際行動における意図に対してより関心が高く、状況次第で柔軟な譲歩を示すことができるのに対して、低い得点の子どもの母親はより権威的に振舞っていた。この相違は質問に対する母親の答えにはっきり表れていた。(Bowlby, 1982 邦訳 1991)

「概念透視力」という訳語には問題がある。直訳すれば「概念的視点取得」である。Piaget が指摘した幼児の自己中心性が、「三つ山問題」で明らかにされたように視覚における視点取得の困難さを意味しているのに対し、「概念的視点取得」は目に見えない他者の視点を取得することの困難さを意味している。要するに今日「心の理論」と呼ばれているものと同じような概念である。

Bowlbyは「心の理論」と愛着パターンに関連がありそうだと述べているのであるが、はたしてどうなのであろうか。「心の理論」については詳しく述べないが、他者の感情や思考を推測する能力のことである。これと愛着パターンとの関連について、Bowlbyは直接述べてはいないものの、安定型の子どもが優れていることを示唆している。このような示唆があったにもかかわらず、その後、愛着パターンと心の理論との関連について顕著な知見は得られていない。それどころか、ほとんど検討されていない。

3. 愛着パターンと心の理論の関連はなぜ研究されないのか

愛着パターンと他の変数、たとえば心の理論との関連というテーマは非常にポピュラーなもののように思える。しかし意外なことに両者の関連に関する研究はほとんどない。

Meins (1997) は安定型の子どもの養育者がより高い“mind-mindedness”（心を気遣う傾向）を有しているとし、生後6ヵ月の子どもとのやりとりにおいて、養育者が子どもの心的状態に見合った発話を行うことが、その後の心の理論課題の高い成績を予測することを確認している (Meins et al., 2002) が、このような研究は数少ない。日本でも研究は極めて少なく、久崎 (2012) が母親の愛着スタイルと子どもの心の理論の関連について検討した研究があるくらいである。久崎は125組の親子について検討し、母親の愛着スタイルの恐れ型の得点と子どもの心の理論課題の得点に有意な負の相関が見られた。子どもの愛着スタイルと心の理論の関連については、Ontai ら (2002) の研究で乳児期の愛着の安定性が幼児期の心の理論の成績を予測しないことが示されたため、久崎は養育者の愛着スタイルを要因としたとしている。久崎は養育者の愛着スタイルを子どもの心の理論形成に影響する要因と位置づけ、次のように述べている。

養育者の愛着が不安定型あるいは未解決型である場合、子どもは養育者

の混乱した表出・行動の中から養育者の心を懸命に読み取ることを通して、他者の心の理解について巧みに発達させるということがあるのであろうか。（久崎, 2012）

久崎はこのように述べているが、養育者の愛着スタイルが子どもの心の理論に直接影響するとは考えにくい。養育者の愛着が不安定型あるいは未解決型であったとしても、それは養育者と養育者の養育者との間でのことであり、世代間連鎖があるとすればその可能性は高いものの、養育者と子どもとの愛着が不安定型あるいは未解決型であるとは限らない。また、心の理論形成において養育者の行動は重要ではあろうが、それがすべてではない。養育者以外の大人、きょうだいや仲間の影響も小さくはないと思われる。久崎の研究では、養育者の恐れ型の得点と子どもの心の理論得点の間に負の相関が見られた。もし養育者の安定型得点と心の理論得点との間に正の相関が見られれば、養育者の愛着スタイルと子どもの心の理論に関連があるといえるかもしれないが、恐れ型得点とのみ相関が見られたということは、愛着スタイルというより養育者の特定のパーソナリティ傾向が子どもの心の理論に影響すると考えるのが妥当であろう。

愛着と心の理論の関連に関する研究が少ない理由として、3つの問題があるのではないと思われる。まず方法上の問題である。子どもの愛着パターンを測定する新奇場面法（strange situation procedure）の実施は容易ではない。時間と手間がかかるのはもちろんのこと、親子の分離を行い、それによって多くの子どもは不安に陥って泣く。倫理的問題はさておき、子どもを泣かせることに多くの養育者は不安を示すであろう。少なくとも日本では、実験者も子どもを泣かせることに罪悪感を感じないでいられない。森下（1988）は、新奇場面法は子どもに強いストレスを与え、親子の信頼関係にまで悪影響を及ぼす恐れがあるとしている。そうしたことから、新奇場面法を用いた研究は最近見られなくなっている。久崎が子どもの愛着スタイルを取り上げなかったのも、それを測ることが困難で

あったためではなからうか。そしてそれ以上に研究を困難にした問題がある。それは発達心理学が「愛着パターンの持続性」と「愛着パターンの世代間連鎖（世代間伝達）」というテーマを扱ったことである。「愛着パターンの持続性」については、すでに Bowlby (1982) が指摘していたことであるが、生後早期の愛着パターンがその後の児童期、青年期まで持続するかという問題である。「愛着パターンの世代間連鎖」は、養育者の愛着パターンが子どもの愛着パターンと一致するかという問題である。どちらも検証には長期にわたる縦断研究が必要となる。

次に研究領域の問題が考えられる。愛着は発達心理学のテーマでもあるが、その原点は精神分析学、比較行動学、システム工学であり、今日では精神医学、臨床心理学、社会心理学と広範な領域で取り上げられているテーマである。そして Bowlby 以来の臨床的研究は主として精神医学において行われており、一方、成人の愛着の研究は主に社会心理学において行われている。これに対し、心の理論は認知発達の問題であり、発達心理学において研究されてきた。すなわち、愛着と心の理論はつながりそうではあるが、研究領域の異なるテーマなのである。今後、両者を扱った研究が増えることが期待されるが、それはもう1つの問題により容易ではないように思われる。

これはあくまで筆者の私見であるが、研究動向に影響しているもう1つの問題はイデオロギー的な問題である。日本にはかつて「3歳児神話」というイデオロギーがあった。それは現在も存在しているが、一応発達心理学においては過去のものであるとしておく。要は「子どもは3歳までは家庭で母親が育てるべき」という思想である。その根拠として Bowlby の愛着理論が利用された。愛着理論から「3歳児神話」が生まれたのではなく、日本では「3歳児神話」が先にあり、その根拠として愛着理論が使われたものと思われる。Bowlby の *Attachment and Loss* が邦訳本では「母子関係の理論」と題されたことがそれを如実に示している。この「3歳児神話」に対して、現代の日本の発達心理学者は一様に批判的である

（「3歳児神話」には科学的根拠がないという言説もあるが、*Attachment and Loss*をはじめとして一定の科学的根拠はある）。批判の重要なポイントは「母親が育てるべき」という点である。子育てを母親の役割と決めつけることが最大の問題（「3歳まで」という問題もある）であり、これは現代の日本においては当然批判の対象となる。

現代の日本で「養育者（母親）に安定した愛着を形成している子どもの方が、不安定な愛着を形成している子どもより他者の心を理解することができる」と主張するのは勇気のいることである。批判を受けるのは当然であるが、その批判が科学的なものでなく、イデオロギー的なものになる可能性もある。しかし、イデオロギー的対立を嫌う日本の学会の体質からすると、このような研究は議論の対象とはならず、注目もされないというのが現実であろう。このような状況が研究の足かせとなっているのかもしれない。

4. 無秩序・無方向型の謎

Mainら（1990）は新奇場面法における子どもの反応を再検討する中で、多くの乳児が不可解な反応を示していることを発見した。たとえば、母親との再会において母親に背を向けながら近づいたり、その場に凍りついたり、床に崩れ落ちたりなどである。これらは新奇場面法の中の一部において見られ、BACの3パターン分類と矛盾するものではなかった。しかしMainらはこの反応に注目し、「無秩序・無方向型」というパターンを考えた。このパターンは、愛着対象が安全基地であると同時に、危険の源として体験されている場合に生じるとMainは考えた。その後、虐待を受けた子どもの多くがこの型であるという報告があり、無秩序・無方向型は4つ目の愛着パターンとして注目されるようになった。

無秩序・無方向型については様々な疑問がある。まず分類基準である。従来の3つのパターンとは異なり、子どもの不可解な反応をもって分類基

準としているが、はたしてこれは妥当なのか。この不可解な反応については別の解釈も可能なのではないか。たとえば「背を向けながら近づく」や「床に崩れ落ちる」といった反応は親の気を引こうとしてふざけているようにも見える。

また、パターンCすなわちアンビバレント型との違いもよくわからない。養育者との再会において泣いて怒りを表すアンビバレント型の反応も不可解といえど不可解である。確かに無秩序・無方向型の反応はこれに比べるとはっきりせず、だからこそ無秩序・無方向なのであろう。しかし養育者を安全基地であると同時に危険の源としているということでは、アンビバレント型も同様なのではないかと思われるし、無秩序・無方向型はそもそも養育者が安全基地（愛着対象）になっていないとも考えられる。1で述べたことと矛盾するが、この4つ目のパターンは必要なのであろうか。成人の愛着の4つのパターン（安定型・愛着軽視型・とらわれ型・未解決型）に対応させるための帳尻合わせのようにも思えるのである。

そして無秩序・無方向型は虐待との関連が指摘されているが、これについても慎重に検討する必要がある。虐待を受けた子どもの多くにこのパターンが見られたのは事実であろうが、このパターンを示した子どもが虐待を受けているのではないかと疑うのは早計に過ぎる。実はふざけていたのかもしれないし、たまたま機嫌がよくなかったのかもしれない。筆者の個人的経験であるが、保育所で保育者に対して不可解な反応を示す乳幼児をしばしば見かける。もちろん新奇場面法ではないのでそこで見られた反応とは比較できないが、ふざけてであったり、その時の気分であったり、子どもの不可解な反応を引き起こす要因は多数あるように思われる。新奇場面法はそれを養育者への愛着だけに限定するための方法であろうが、愛着以外の要因を排除できているとは限らない。いずれにせよ、さらなる検討が必要であるが、残念ながら新奇場面法は過去のものとなっている。ただ、愛着パターンの測定ということであれば、新奇場面法でなくても、養育者との分離—再会の際の反応を見れば可能であると思われる。

Bowlbyは愛着パターンを安定的、持続的なものとし、その後もそのように考えられてきたが、愛着が養育者との相互作用を通じて形成されるものであるとすれば、少なくとも乳幼児期においてそのパターンは安定していないのではないか。そして無秩序・無方向型の反応は、愛着パターンがまだ安定していない未分化な状態の現れととらえることができるのではなからうか。Mainは、無秩序・無方向型が子どもにとって養育者が安全基地であると同時に危険の源であるというまさにアンビバレントな存在であることから生じると考えたが、安全基地でも危険の源でもない未分化な状態であることから生じると考えてもよいのではなからうか。

おわりに

学生の時、友人のついでで母子家庭の高校生から話を聞いた。核家族が家族のスタンダードであると思い込んでいた筆者は、自分の無知を知り少なからず衝撃を受けた。母子関係と愛着ということに関心を持ったのはそれがきっかけであったかもしれない。教員になって、中国からの留学生に愛着の話をしたところ、そんな話は聞いたことがないといわれたが、その時は驚かなかった。

筆者は愛着という概念について、その有効性を認識しつつも、注意して論じる必要があると考えてきた。愛着概念が注目され、その重要性がますます強調されるようになった今日、その思いは一層強くなった。愛着は「3歳児神話」のように、ともすれば母親育児の正統性を主張する概念武装として用いられる恐れがある。愛着概念は有効であるが、母子に関する誤った認識を形成する恐れがある。今回取り上げた愛着パターンも誤っているとまではいえないが、再検討が必要と考えている。

「正義」が「不正義」に対する概念であると同様に、「安定型愛着」と「不安定型愛着」は対極にあるが、安定—不安定はスペクトラム（連続体）としてとらえられるはずである。そして「正義」と同様に、どちらが真の

「安定」なのかわからないのではないか。

引用文献

- Ainsworth, M.D.S. (1963). The development of infant-mother interaction among the Ganda. In B.M. Foss (Ed.), *Determinants of infant behavior*. New York: Wiley.
- Arend, R.A., Gove, F.L., and Sroufe, L.A. (1979). Continuity of individual adaptation from infancy to kindergarten: a predictive study of ego-resiliency and curiosity in pre-schoolers. *Child Development*, 50, 950-959.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss: Vol.1 Attachment*. London: Hogarth Press and the Institute of Psycho-Analysis. (ボウルビィ・J, (1976) 母子関係の理論 I 愛着行動 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子訳 東京: 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1982). *Attachment and Loss: Vol.1 Attachment*. London: Hogarth Press and the Institute of Psycho-Analysis. (ボウルビィ・J, (1991) 母子関係の理論 I 愛着行動 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一訳 東京: 岩崎学術出版社)
- 久崎孝浩 (2012). 心の理論発達と親の愛着スタイルの関連性 応用障害心理学研究, 11, 69-78.
- Main, M. and Solomon, J. (1990). Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented during the Ainsworth Strange situation. In M. Greenberg, D. Cicchetti, and M. Cummings (Eds.), *Attachment during the preschool years: Theory, research and intervention*. Chicago: University of Chicago Press.
- Meins, E. (1997). *Security of attachment and the social development of cognition*. East Sussex: Psychology Press.
- Meins, E., Fernyhough, C., Wainwright, R., Das Gupta, M., Fradley, E., and Tuckey, M. (2002). Maternal mind-mindedness and attachment security as predictors of theory of mind understanding. *Child Development*, 73, 1715-1726.
- 森下正康 (1988). 乳幼児の発達と家族関係 児童心理学の進歩, 27. 東京: 金子書房
- Ontai, L.L., and Thompson, R.A. (2002). Patterns of attachment and maternal discourse effects on children's emotion understanding from 3 to 5 years of age. *Social Development*, 12, 657-675.

清水弘司（1999）．幼児期の母子分離型と青年期の自己像：連続性と転機を検討
発達心理学研究, 10, 1-10.

